
特訓！ いいんちょ！

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特訓！ いいんちよ！

【Nコード】

N6759J

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

僕のクラスの委員長、常盤さん。

彼女は一見無愛想だけれど、本当は優しい女の子で。僕はそんな常盤さんに、ある日特訓するように言いつけられる。

こうも女の子に密着されて挟まれていると、だんだん体内の温度が上昇してきて、肌から変な汗が吹き出てくる。

ねえ、春日君。これあげる。

鞆からチェック柄の可愛い包みを取り出して、僕の前で掲げる女子A。それをそっと開き、中からクッキーをつまんで、あーん、と僕の口の前に差し出す。

ねえ、春日君。今度の日曜日ここに行かない？

女子Bが、雑誌のページを示してすり寄ってくる。僕が虚ろな目でそれを見ると、「こっちこっち」と別の声がして頬をつつかれる。つつかれた方向に首を向けると、女子Cが同じように雑誌を広げて、それを指し示す。「あんな人なんていいからさ。私と行こうよ」

こんな風に、いつも僕の周囲は、女子が取り囲んでいて、てんやわんやしている。それは、僕の端正すぎる顔の所為だ。「端正すぎる顔」なんて、自分で何言っただ、この野郎、と皆思うかもしれないんだけど、これが事実で、僕の顔は非の打ちどころのない美しさを持っている。

一見女の子にも見えなくないほっそりとした顔で、肌は雪のように白くすべすべしており、目はぱっちりとき、眉は程よい太さで綺麗な形をしている。鼻も高く、細い。

こんなに細かく自分の顔を説明するなんて、お前どんだけ日頃から鏡見てんだよ、と白い目で見られそう。けど、この描写は、すべて僕の周りにいるこの女子たちの受け売りだ。

何しろ、毎日君の顔はくだね、綺麗だね、と耳元で甘くささやかれるものだから、そりゃ自然と暗記してしまうだろう。

僕が教室の片隅で、きゃあきゃああと女子にもみくちゃにされると、突然眼鏡をかけたクラス委員の女子が近づいてきて、どきな

さい、と僕の周りに群がる女子を蹴っ飛ばして、僕の前に進み出た。
「春日君。ちょっといい？」

一見、なんだか怒ってそうにも見える無表情な顔をして、彼女、常盤さんは僕の腕をつかんだ。それを見た女子たちがぶーぶーと文句を言い始める。

「男子のクラス委員である君に、手伝ってほしいことがあるの」
何度も聞いたそのセリフに、僕は心から救われたような、安心感の滲んだ顔でうなずき、席から立つと、彼女の後に続いて廊下に出た。

廊下を並んで歩きながら、僕はいつもながら、感謝を込めて常盤さんに頭を下げる。

「ありがとう、常盤さん。助かったよ」

僕がそう言っていると、常盤さんはびたつと足を止めて振り返り、「あのねえ」と相変わらず怒ったような声で、ぴしッと僕の眉間に人差し指を当てた。

「いつも助けてやっているけど、あなた自身があの子たちをなんとかしないことには事態は何にも解決しないのよ。わかってるの？」

わかってます、と僕はしょんぼりとした顔で下を向く。

「来ないでって言ってるんだけど、ふと気を逸らした隙に、すり寄ってきて、気づけばあんな風に群れているんです」

常盤さんは眼鏡に手を当てながら、はあ、と息を吐く。

「あなた、一度、彼女たちにガツンと言ってやればいいのよ」

「それができないから困ってるんです」

僕がぼそぼそ言っていると、常盤さんは、「あーもう」とこめかみに手を当て、

「それをやってみせるのが、男ってものでしょうが。大体、あんたを見てると男って感じがしないのよね。いっそ女になっちゃえば？」
そうまくしたてられて、僕は、うう、と涙ぐみ、萎縮する。

「あーもう、泣くなってもう」

常盤さんは懷からハンカチを取り出して、それを僕の目に当てる。

僕はそのハンカチを受け取り、常盤さんの温もりが目元に温かく触れるのを感じた。僕は、とつぶやく。

「僕は、常盤さんが好きです」

突然の僕の言葉に、常盤さんが、な、とのけぞる。その眼鏡がずるつと彼女の耳から外れかかる。

「僕は、常盤さんのようになりたい。はっきりと物を言えて、人を優しく助けてあげられる、常盤さんみたいな人に」

そう言って、えんえん泣きだすと、常盤さんは真っ赤になった顔を背けるように脇を向き、

「そんな恥ずかしいこと平気で言えるってのも一種の才能ね。まったくもう」

とそつと僕の背中に手を置き、さすってくれる。

僕は屋上の柵にもたれかかりながら、濡れたハンカチを隣に立つ常盤さんに、これ明日返しますね、と指し示す。

「どう、落ち着いた？」

「はい。また泣いてしまいました。男のなのに情けないですね」

「ほんとよ。まったく」

常盤さんはそう言いながらも、温かく微笑んでくれる。

「春日君。君を鍛えなおしてあげようか」

突然の言葉に、僕はえ？ と常盤さんの顔を見る。常盤さんは反対側にある校舎へとまっすぐ視線を向けながら、にやりと笑う。

「明日、空いてる？」

「空いてますけど」

常盤さんはよし、と意を決したようにうなずき、

「度胸試しよ」

そう言って僕にいたずらっぽい笑みを向けた。

日曜日。僕は常盤さんと遊園地で待ち合わせをした。予定より早く来てしまって少々待つことを覚悟して待ち合わせ場所まで行くと、

すでに常盤さんが時計台の前に立っていた。

僕の姿を認めると、おーい、と軽く手を振ってくる。

僕は小走りに近づき、待ちましたか？　と一応訊いてみる。常盤さんはロングストレートの髪を手で掬って、別に、とつぶやき、なぜか脇を向いてしまう。

僕は、そんな常盤さんの様子に不安を覚え、怒ってます？　と彼女の腕をつかむ。

常盤さんは、怒ってないわよ、とぶっきらぼうにつぶやく。

「あんたねえ、そうやってすぐに人の顔色うかがう癖、なんとかした方が良いわよ。そんなんだから、あの女子たちにつけ込まれるのよ」

すみません、と僕はうなだれる。

「しょっぱなからそんな落ち込んでどうするの。今日、何のためにここに来たのか、わかってるの？」

「特訓、のためです」

僕は上目づかいに常盤さんを見る。そこではた、と気づく。今日の常盤さんはどこか雰囲気が違うな、と思っていたら、それは普段の地味な雰囲気から打って変わって服装が華やかで、明るい雰囲気を漂わせているからだと気づく。

僕はにっこりと微笑み、

「似合いますよ、常盤さん」

と彼女の姿を見つめながらつぶやく。すると、脇を向いていた常盤さんが、「な」と顔を赤くして、

「そりゃ、せっかくの休みだから、おしゃれぐらいね」

とぼりぼりと頬をかく。僕は照れた様子の常盤さんが微笑ましく、くすくすと笑う。

「何よ。何がおかしいのよ。……行くわよ」

常盤さんはがしつと僕の腕をつかむと、強引に引きずるように遊園地の入り口へと歩いていく。

「これ、ですか」

僕は首が痛くなってきそうなほど上を向いて、高くにあるその絶叫マシンのレールを見つめる。レールの上を、びゅん、と豪速でマシンが走っていく。きゃあ、と女性の悲鳴が上から降ってくる。

「そう、これ」

常盤さんは若干震えた声で、そうつぶやくと、「行くわよ」と僕の腕を引いてずんずんと行列の最後尾へと進んでいく。

常盤さんが並びながら、結構待ち時間ありそうだから、とお菓子の袋を開けて差し出してくる。

「ありがとう」

僕はポテチを一枚つまむと、ばりばりとそれを頬張る。「ねえ、あの子可愛くない？」と後ろの方から女性の声がする。振り向いてみると、二人連れの少女と目が合って、彼女達はきゃあ嬉しそうな顔をして、はしゃぎ合う。

僕は赤い顔で再び前へ向き直ると、常盤さんがこちらをじっと見つめていた。

「何ですか」

「いや、別に。いつもは人のいるところにあんまり来ないんだっけ、あんた」

「ええ」

目立つからねえ、と常盤さんはぼりぼりとポテチを頬張る。

「こんな人の多いところに来るの初めてで……というより、誰かとかいうところに来るのってめったにないです」

僕はそう言って、俯く。

「僕、友達いないから……」

常盤さんは、それには答えず、無言でポテチの袋を差し出してくる。

「男の友達を作ろうと思っても、なぜかみんな、冷ややかな目で僕を見て、去っていくんです」

「嫉妬か。あんたも大変ねえ」

もぐもぐばりばりと相変わらず音を立てながら、常盤さんがしみじみとうなずく。

「そういえば、なんだか今日、常盤さんとデートに来てみたいですね」

僕がぼつりとつぶやくと、常盤さんが突然、げほっと咳をして喉を押さえる。

「どうしたんですか、大丈夫ですか」

背中をさすりながら、顔を覗き込むと、常盤さんは平気平気、とどこか赤い顔で言う。

僕たちの番が回って来た。僕はぎこちなくマシンに乗る。

僕はそこでふと、かちこちに固まった体を常盤さんの方へ振り向かせると、

「あの……すみません」

青白い顔で、眼の縁に涙を溜めて、懇願するように言う。

「やっぱやめませんか」

「何言ってるのよ。もうここまで来たら引き下がれないわよ」

でも……、とつぶやく僕の肩をつかみ、常盤さんは無理やり座らせる。

「僕、こういうのすごく苦手なんですよ。昔小学生の時に一度乗って、一日何も食べれなかったんです」

「そう。こんなところでへばってるようじゃ、あの女子たちを見返すことなんてできないわよ」

僕はその声にはっと我に返り、きゃあきゃあ僕の周りで戯れる女子たちの姿を思い浮かべる。僕はきつと眉を寄せると、黙ってシートベルトをつかみ、腰に装着する。

「どんとこい、です」

僕がつぶやくと、常盤さんはよろしい、とうなずき、自分もシートベルトを付ける。

マシンが動き出した。僕はごくりと唾を呑む。マシンはゆっくりとレールの坂を上っていく。そして、その坂の頂点まで達したとき

――。

「うぎゃああっ！」

ぐらりと視界が傾く中、常盤さんの絶叫が響いた。

僕はベンチに腰をかけたまま、体をぐでーとベンチの背に寄りかからせた常盤さんの顔をうかがう。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫よ。しかし、意外に応えたわね」

そう言って、常盤さんはうつぶと口を押さえる。僕は慌ててビニール袋を取り出して、常盤さんの口へと寄せるが、常盤さんはそれを黙って制止する。

「次は、あれよ」

常盤さんは、よれよれに垂れた人差し指を一つの方角へ差し向ける。見ると、お化け屋敷がある。

「あれですか」

冷や汗が額を垂れていく。

「それにしても、あんたよく平気ね。けろっとしてるじゃないけど」
常盤さんが、半目で僕を見る。

「そうなんですよ」

僕は不敵に笑って、胸をぽんと叩く。

「第一の度胸試しは、どうやら成功見たいですね。この調子で行きましよう」

僕が張りきってはふん、と鼻息を鳴らすと、常盤さんは「そうそう、その息」と苦笑する。

僕たちは暗い通路を二人で歩いていった。常盤さんがびたりと体を寄せてきて、その温もりを肌で感じる。なんだか女の子っぽい、甘い匂いがする。僕は、接近した彼女の体にドキドキと胸を高鳴らせながら、彼女と一緒にランプを掲げて持ち、歩き続ける。

「お化け屋敷なんて何年ぶりかしら。子どもの時以来かしらね」

常盤さんは、余裕の素振りを見せたいのか、通路に響き渡る大きな声でそう言う。その手はがたと震えて、先ほどからランプの光が左右にちらつく。

「大丈夫ですか、常盤さん」

「だ、大丈夫に決まってるじゃない」

そう言いながら、常盤さんは一層体を寄せてきて、ふと腕に小ぶりの胸のふくらみが当たり、僕はひゃう、と体を飛びあがらせる。

「あんた、怖がってるの？」

常盤さんは薄笑いを浮かべてこちらを見る。僕は一応うなずいておいた。まだ柔らかなものが腕に当たったままだけれど、そんなこと常盤さんに指摘できる訳がない。

通路が左に折れていて、その曲がり角を曲がった時――。

「ぐぎゃあっ！」

怪獣の鳴き声を真似たその叫びが、通路に木霊した。もじやもじやに毛を生やしたゾンビらしき人影が通路の奥から現れる。

その途端、ものすごい勢いで常盤さんが叫んだ。僕は咄嗟に耳に手を当てる。

「ちよっ、ちよっ　常盤さん」

常盤さんは言っても聞かないようで、取り乱して、掴んでいたランプを振り回し、化け物を追っ払おうとする。

「ぐぎゃおっ、がおっ」

化け物はそんな常盤さんにさらに近づいて、腕を振り上げる。常

盤さんも対抗するように、ランプを振り上げ、ロングストレートの髪を振り乱す。

「この——」

常盤さんはランプで思い切り、化け物を殴った。ばこん、と鈍い音が鳴る。

「ぐぎ——」

化け物は頭を押さえて引き下がる。うわあ、痛そう。

「これ以上近づいたら、ただじゃおかenないぞ！」

常盤さんは真っ赤な顔で——どっちかおぼけかわからないくらいの危機迫った形相で——ランプを化け物に突きつけた。

「常盤さん。あれはやりすぎですよ」

僕はソフトクリームを常盤さんに手渡しながら、そう言う。

「仕方ないじゃない。あいつ、むんむん変な匂い漂わせながら、べたべたべたべた近づいてくるんだもん。咄嗟に手が動いたの」

常盤さんはそう言いつつも、反省しているように顔をゆがめている。

「常盤さん、怖い駄目なんですな。なんかずっと僕の腕にすがりついていたじゃないですか」

常盤さんは、な、と顔をみるみる朱に染める。

「すがりついてなんかいないわよ」

そう言って、顔を背けてしまう。

「次、どれにします？」

「今度は、あれ」

常盤さんは、観覧車を指差す。

「観覧車ですか。なんであれが度胸試しなんですか」

「もう度胸試しはおしまい。気分転換に乗りましょ」

そう言って、僕の手を取り、常盤さんは「ほら早く」とにこりと優しく微笑む。その笑顔に、僕の胸が高鳴った。

うう……可愛い。

僕は、観覧車の中で、常盤さんと向かい合わせに腰を下ろしていた。夕日の光が差し込み、車内は淡く色塗られている。日差しが頬に当たって、ほんのりと暖かい。

「ねえ、春日君」

ぽつりと常盤さんがつぶやき、僕は横へ向けていた視線を正面に戻す。

「なんですか」

「春日君って、私の性格どう思う？」

突然訊かれて、僕は、は？ と声を上げる。

「だから、私の性格どう思う？」

常盤さんはどこか言いにくそうに脇を剥く。

「どうって……頼りがいのある人だと思います」

「他には？」

「責任感の強い人だと思います」

「他には？」

「勤勉で、まじめな人だと思います」

「他には？」

「とにかく、常盤さんは僕にとって良い人なんです」

僕が息切れしながら言うと、常盤さんはふとこちらに振り向き、そう、ありがとう、と言う。夕日の光の所為か、常盤さんの頬が朱色に見える。

「私ってさ」

それは、消え入りそうな声だった。

「無愛想ってよく言われるのよね。他には、感情がないとか。機械、とか」

僕は突然何を言い出すのかときよんとしてしまう。

「いつも人に接する時も無愛想だし、言葉もキツイし。人から嫌われやすいのね」

常盤さんはそう言って、ずっと自分の髪に手を伸ばし、ロングの

髪を梳く。

「どう思う？」

ちらりと視線を投げかけられて、僕は少々沈黙したが、すぐに口を開く。

「どうもこうも、さっき言ったじゃないですか。常盤さんは僕にとって良い人なんです。大切な人なんです」

大切な人、と常盤さんがつぶやいて、今度は夕日の所為じゃないとわかるほどに耳まで真っ赤になった。

「確かに常盤さんは無愛想で言葉はきついけど、そんな常盤さんでって、時折見せる明るい笑顔とか、照れてる様子とか、色々可愛いところいっぱいあるじゃないですか。僕は知ってますよ」

僕はそう真剣にしゃべりたて、がしつと常盤さんの両手をつかむ。「だから、自分のこと、もっと自信持つてください」

僕の真剣な眼差しに、たじろぐように常盤さんは身を引いたが、ふと口元にうっすらと笑みを浮かべて、苦笑した。

「うん。ありがと」

そう言って、僕の手をそつと握り返してきた。

僕と常盤さんは、観覧車を降りた後、入り口に向かって歩いていった。園内から人がぼちぼち減って来たようで、誰も座らないベンチがあちこちにあり、あれほど並んでいた絶叫マシンの前には行列はわずかしかなくていなかった。

僕と常盤さんは無言で歩く。

今日は、とても楽しかったと思う。女の子と一緒にいてこんなに楽しい思いをできたなんて、なんかびっくりだ。

僕はふと常盤さんの横顔を見る。眼鏡の銀色のフレームが光っていて、白い頬にはオレンジ色の影ができていて、その目はまっすぐ前を向いている。その真黒な瞳が、きらきらと夕日の光に輝いているのを見て、僕は綺麗だな、と思った。その時――。

「おい」

突然背後から声が聞こえて、振り返ったら、その瞬間、腹に重い衝撃がきた。

僕は呻いて、地面に膝をつく。目の前には、膝を振り上げた若い男の姿がある。その男の手に握られているものを見て、僕は目を見開く。

「常盤さん――」

逃げて、と言い切る前に、男の手が常盤さんの腕をつかんでいた。「よう、姉ちゃん。可愛いね。こんな男ほっといて、俺と歩かねえ？」

ナイフを妖しく光らせながら、男はその刃先を常盤さんの首筋に突きつける。

「新手のナンパ？ やだやだ」

口ぶりは余裕でいるようだが、その顔は血の気が失せて、真っ白に染まっていた。

「と、常盤さんを……話せ」

僕が腹を押さえながら、そう声を絞り出すと、男はああ？ と僕を睨みつけ、その瞬間、もう一度膝を振り上げる。

「がっ」

僕は口から唾液を吐きだしながら、地面に手をつく。

「お前みたいな優男に、この姉ちゃんは似合わねえよ。さっさとどっか行けよ、タコ」

男はそう言って、僕に向かって唾を吐く。

「春日君、逃げて。私のことは良いから」

そんなことを言って、力なく微笑む常盤さん。僕はぎり、と歯ぎしりして、立ち上がる。

きっと男の顔を見据えて、構える。

「あ？ なんだ？ 俺とやる気かよ。その前にこの姉ちゃんの首、切っちゃうぞ」

男がそう軽口を立ててげらげら笑い出したその瞬間――。僕はすぐさま男に近づき、男の服の襟元をつかむ。

「うああああっ」

叫びを上げながら、僕は太外刈りを繰り返す。男は不意打ちに、おわっと目を白黒させて、そのまま背後に倒れかける。その隙に、常盤さんは男の腕から逃れる。

「てめえ！」

ひゅっとナイフを一閃。僕はそれを、体を引くことで寸前のところでかわし、もう一度男の襟もとを掴むと、背後を向く。

「うおおああっ」

言葉から奇声を発しながら、僕は背負い投げをする。男の体重が背中へのしかかってくるが、それも一瞬のこと。すぐに男の体が宙に浮き、前方に投げ出される。

男の体は大きく飛び、前方のアスファルトの上に大きく叩きつけられた。男は呻きながら、地面の上でのびている。そこで、若い女性警備員を携えてやってくるのを見て、男は慌てて立ち上がり、「ちきしょう！」と咆哮すると、その場を走り去って行った。

常盤さんが、走り去っていく男の背中を見つめながら、へたりとその場にしゃがみこむ。

「大丈夫ですか、常盤さん」

僕は息切れしながら、彼女の傍により、腰をかがませて彼女の顔を覗き込む。

「ええ……。なんとか」

彼女はそう言って薄く笑ったが、僕の心臓はまだ大きく高鳴っていて、不安と安心感がごちゃ混ぜになって、たまらずに彼女の手を取る。その手を包み込みながら、

「よかった。ホントに、よかった」

常盤さんは、ちらりと僕を見ると、「あんた、強いわね」とぽつりと零した。

「体育、得意なんです。特に柔道が」

「見かけはひよろつとしてるのに、意外ね」

そう言いながら、よっこいしょと立ち上がる。

僕は朝、待ち合わせした時と同じように、時計台の前で常盤さんと向かい合っていた。

「今日は色々付き合ってもらってありがとうございました」

「大した度胸試しでもなかったわね。まあ、最後のは本当に度胸を試されたけれど」

そう言って、常盤さんは苦笑いする。

「あんたさあ」

そこで、ぽつりと口にする。

「もう十分、度胸あるよ。私が保証する」

突然言われて、僕はぽかんとする。

「それじゃあ、また明日」

常盤さんはそう言って、長い髪を翻して、歩き出す。しかし、ふと立ち止まって、

「ありがとう。今日一日、私も楽しかった」

面と向かって言えば良いのに、照れ臭いのか、常盤さんは僕に背を向けたままそう言った。

僕も微笑み、

「ええ。楽しかったです」

その背中に言葉をかける。

月曜日。教室に來ると、早くも僕の席の周りに女子たちが陣取って喋っていた。

僕はもうそこでたじろぎ、教室へ踏み出そうとした足を止める。

「今日こそは……」

そう意を決して踏みとどめた足を前へ出す。

教室に入って來た僕を見て、女子たちが、春日くんと高い声を上げる。いつもならばそこで僕は耳を真っ赤にして、クラスメイトの視線にたじろんでしまうが、今日は――。きっと目を女子たちに向け、ずんずんと自分の席に近づき、黙って座る。

「春日君、どうして昨日連絡してくれなかったの。遊園地に行く約束したじゃない」

金髪で、肌がこげ茶色に焼けた女子が、僕の腕に指を這わせて、切なげに言う。僕は彼女に振り向き、険しい顔のまま、口を開く。

「遊園地になら、昨日、他の女の子と言いました」

その強気な言葉に、一瞬金髪の女子は面食らったように僕の顔を見たが、すぐに拗ねたような顔で「えゝ誰よそれ」とつぶやく。他の女子も、僕のいろんなところをすりすり触って、「誰、誰？」と不満げな声を上げる。

「常盤さんです」

僕がつんとした顔で言うと、ええゝと女子たちの声が教室に反響する。

「あの眼鏡委員長の、常盤さん？」

「マジで？ 春日君、あんなのが趣味だったの？」

口々に常盤さんを罵倒する女子に、僕はカチンときた。僕は突然立ち上がり、声を張り上げた。

「常盤さんは良い人です！ 常盤さんを悪く言う人は僕が許さない！」

そう叫んだと同時に、本人が後ろのドアから顔を出した。入ってきにくい空気を感じたのか、常盤さんは顔を硬直させて足を止めている。

「常盤さん、本当なの？ 昨日春日君と遊園地に行ったって」

金髪の女子が、若干苛立たしげにそう言う。

常盤さんは一瞬ためらったようだったが、「ええそうよ」とうなずいて、平然と教室に入ってくる。

またもや、ええゝと女子の声。

「春日君、常盤さんと付き合ってるの？」

僕は顔を真っ赤にして、ぶんぶんと首を振る。常盤さんも、違う！ と少し上ずった声で否定する。

「どうしてよ、春日君。私たちを裏切る気？」

腕を掴んで揺らしてくる。僕は、きつと眉を逆立て、つぶやく。

「もう、僕にまといつくの、やめてください!」

そう言って、ベチン、とその女子の手を払いのける。周囲の女子が口をぽかんと開ける。手を払われた女子は、啞然とした顔で目を見開いていたが、みるみる目に涙を溜めて、すすり泣きだした。

「春日君が、私のこと嫌いになっちゃったよぉ〜」

わんわんと泣くので、僕も若干慌てて、あの……と泣いている女子に手を伸ばす。

「春日君が反抗期になっちゃった」

「春日君ひど〜い、泣かした〜」

ひどおい、と連呼され。僕は冷や汗を垂らしながら、あたふたする。

けれど、僕はそこで思い直し、きつと眉を寄せる。

「いつも周囲に寄りつかれて迷惑してるんです!」

そう言い放った途端、周囲の女子たちが再び啞然とした顔を向けてきて、その途端、一気にわんわんと泣きだした。

ひどおい、と女子たちの雄たけびが木霊する中、僕は若干怖じ気づきながらも、席を立ち、教室を出ていく。

戸口をくぐる前、一瞬足を止めて振り返ると、常盤さんが不敵に笑って、親指を立てていた。

「上出来よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6759j/>

特訓！ いいんちょ！

2011年10月5日02時35分発行